

## 平成 25 年度 わくわく市民懇談会

- 1 日 時 平成25年10月1日（火）午後6時50分～午後7時55分
- 2 会 場 柳長料理店
- 3 出席者 公益社団法人 中野青年会議所 34名  
市長及び随員職員2名
- 4 講話内容  
公益社団法人中野青年会議所主催の9月例会「市長と語ろう」として開催  
テーマ：音楽のまちづくり



### 【市長講話】

実は宿題をいただいたと思ひまして、一生懸命、自分の中にある音楽都市とは一体何かということを追及してきました。これまでのわくわく市民懇談会で、パワーポイントを使って滔々とお話をするのですが、今日は話し合いということですので、あえていただいたテーマに絞り込んでお話をさせていただきましたという趣旨でよろしいでしょうか。それでは話を進めます。

音楽に関しては、皆様のこれまでの活動経過に目を通させていただきましたが、都合4回ほど音楽に係る様々な催し物をJCの皆さんが中心になって活動してきていただいております、本当にびっくりしました。ありがたいなあと

思いました。

中野市は言うまでもなく中山晋平先生、高野辰之先生、久石譲先生のほか、ソプラノでも桑原伊づみさんですとか、いろいろな音楽関係の方を輩出しています。また、いろいろなところでコンサートが開かれています。宣伝ではないのですが、12日にはこちらで第6回スイングバードジャズコンサートの演奏会が行われます。いろいろな意味で音楽活動が、若い人もお年を召された方も含めて行われています。また、新聞で発表されている音楽にまつわる活動を調べたところでは、年間を通じて中野市では70数件開催されています。

ところが、これらの音楽に関する活動の情報が全く共有されていないという事実があります。こうした点が、これからの中野市の課題ではないかと思えます。一見、何もやっていないように見えますが、活動自体はいろいろなところで盛んに行われていまして、それを年代、高齢者から子どもたち、それから公的に行われるものと広がりがあるもの、一部の仲間たちの努力で行われているものなどがあります。こうしたことを考えて、中野市が音楽都市だということを位置付けるためには、一つにはそうした活動を行政が後ろからバックアップしてより盛んに音楽に親しんでいただく、より音楽に対する造詣を深めていただくというような政策が必要なんだと。そして音楽をもって喜びを感じ、生きがいを感じ、また、子ども達ですと音楽をとおして情操・感性を磨いていく、というようなことも必要なんじゃないかと。

世の中には物事を何かやった場合に一つだけの目的・効果というものは絶対に言えないわけで、副次的・複合的な効果があります。音楽も教育的な見地もあります。子どもたちに本物を聞かせてあげようというようなこともあります。いい音楽を聴けばそれなりの子ども達の情操・知能の発達になると。これは小林秀雄さんという方が「真贋」という本に書いています。小林秀雄さんは鎌倉に住んでいます。この方は美術品収集家・評論家として有名で、随筆や本を読んだ方もいらっしゃると思いますが、その本を読みますと、美術の真贋を見極めるには本物を見ろ、ということで一生懸命本物に接している。そういった意味でも、中野市で、一つはそういったコンサートをやるのもいいなと。

もう一つは、私が選挙の中で申し上げ、今もそう思っていますが、いずれの都市も首長さんたちが言い始めていますが、地域人口減少化の中で、交流人口を増やしていこうと。交流という切り口で音楽を考える。例えば、中山晋平記念音楽賞についても、いろいろな他地域から人が来てそこでコンサートを行う

ということで交流のきっかけになる。その意味で中野を知ってもらって、音楽だけでない他の文化的な土壌・風土も知ってもらって中野に対する造詣を深めてもらう、というような意味もございます。

そういった意味で、これから私が音楽都市といった場合には、ただただ音楽に力を入れて音楽教育・活動を推進するということは考えておらず、市民の皆さんには音楽という機会をどんどん活用してもらって、そして外に向かって行政がどんどんまとめて情報発信していくような仕掛け・仕組みがこれから必要ではないかと思えます。

そんな意味で、JCの皆さんの報告書を見せていただくときに、音楽都市を構築していくための4つの戦略を考えたんですけど、一つは音楽活動の現状把握、今どんなことをどういった人たちがどういった目的でやっているのか、それは切り口として交流なのか、連携なのか、どういったことをしているのかという情報が欲しかった。これはつぶさに欲しいと。

それから当然のことながらそういったことがあったときには、情報を集めた上で横の連携、連携できるものは連携してより発展的なアレンジメントという言葉を使っていますが、変えて、変化を変容させて、さらにブラッシュアップさせた上でどんどん楽しさを追求していくような活性化の仕方を工夫する。

一方で、プラットフォームを作りまして、そこからはまとめて中野市ではこんな音楽活動が展開されていますというような、外に向かっての情報発信、その際の切り口としては、やはりここは音楽にふさわしい、例えば童謡と唱歌のふるさと、というような形で訴えかけるのも良いかもしれません。カテゴリキーという言葉も皆さんお聞きになったかと思えますけど、そういったものを行政が少し音頭を取ってやっていきたい。

一方では、公共拠点施設検討会にもJCの代表者に出ています。音楽都市にふさわしいような活動拠点を整備する必要があると。その検討会の中でも話がありました。アーティストが長野県で一番演奏したくない会場が中野市民会館だと言われました。3つあると言われましたが1つは建て替え中ということで、いずれにしても3本の指に入るくらい、アーティストから、「ここでは演奏したくない」と言われるようなところでは、子どもに聞かせることもできないし、人も寄ってこないだろうと。一定の仕掛けが必要だということでハードの整備が必要になる。

繰り返しますと現状把握、今現状がどうなっているか、それから、活性化さ

せるためにアレンジするような工夫が必要、もう一つは、情報発信をしていく、そしてそれなりの設備が必要だというような形で考えています。

いずれにしても、戦略的な考え方で物事を進めていくことが重要であると考えています。

ちょっと整理してみますと、音楽都市のコンセプトとは何かというと、全然まとまっていないんですが、私の方で考えたのが、やはり推進のプラットフォームがどうしても必要だと。どういう表現がいいのか、推進母体というか団体というか、会社で言ったらヘッドクォーターですね。そこが中心になって考えてどんどん企画を下におろして行って皆さんにやってもらう、ないしはやっている活動を支えるという仕掛けが必要だと。この組織は若い人たちが中心になってやってきてもらいたい。でないと変革がないと私は思っています。

ある意味で中高齢者の同一の世代だけで、例えば一つの団体がずっと停滞的にあるというのでは若い人たちが新しく来なければ、例えば、私は（前職を）退職するころ合唱を始めたんですけど、芸大を出た先生の下でモーツァルトのレクイエムからスタートしまして、若い人が入ってくると、例えばソプラノなんかですと、声の質が全然違うと、老々ばかりで歌っていると声に張りがないとかいろいろありますが、それが老いも若きも一緒になって歌うと、その調和を取って非常にいい和音が聞こえるということがございます。世代間の血を交換しながら運営するのがいいということで、これは多様な世代が集まったプラットフォームが必要だと思っています。その中でも、普段J Cの皆さんのような活動をしている、それぞれの分野、先端、担当をもってやっていらっしゃるような組織的な活動をされてきた方に、総合プロデューサー的なものをしてもらいたい。

それからもう一つは、今日お越しの皆さんは、多種多様な業界業種、職業に就いていらっしゃると思いますけれども、多様な分野の方が集結することが必要だと思っています。あとは情熱ですね。どれだけ続けられるか。これは経済界の話ですけれども、私は横浜経済金融懇話会、当時の日銀の横浜支店長、今問題になっている東京電力の常務取締役横浜支社長とか、NTTなどがいろいろと中心になりまして、「がんばれ横浜！わいわい会」というものを作りました。これはJ Cさんや商工会議所、同友会というような経済組織があるんですけれども、それらの組織では言い切れないことをみんなで言い合おうと、横浜を良くするために好き勝手を言おうという会を作りました。立ち上げてから私は

14・5年間事務局長をやっていたんですけれども、途中で悩むことがあっても、情熱でこの会議は意義がある、ということで継続したことによって現在もその会は続いており、おかげさまでいろんな意味でこれから戦略的に外と繋がろうという動きが出てきています。10年位たったときには、そろそろやめようかという声がメンバーの方からも出たんですが、おつきあいした横浜市長が3代にわたるなどもあり、継続は力なりという言葉がありますが、いつも原点に戻ってこの会の趣旨は何かというような形で情熱をもって、目的をもって取り組めるような人が、ヘッドクォーターには必要だと。

あとは、当然のことながら地域、これからは地域を考えて、地域に軸足を置いて物事を考えるということ、大きく外に羽ばたくことも必要なんですが、地域に根付いて物事を考えていく。

当然のことながら、JCの方は他のJCの団体の方ともおつきあいがあると思いますが、ネットワークを大事にする。それからあまり過去を引っ張らないでクリエイティブにやっていく人。いろいろと要求が多いですが、一番大切なのは、ビジョンをもって、将来を展望して、将来こうなりたいなというのをいつも考えながら行動できる人、夢を持っている人たちが集まってヘッドクォーターをやっていたら、ものすごい中野市の力が発揮されるのではないかと考えています。

推進のプラットフォームについて若干ここで話してしまったんですが、音楽都市といった場合に、音楽都市ってどんなイメージを持ちますかということで逆に皆さんから宿題をいただいて考えました。

音楽に造詣が深い人たちが募っているとか、絶え間なくまちの中に音楽が流れているとか、あとは、ブランドに近いんですが、中野市というと想起される音楽にまつわるものがあるとか、特徴のある祭典が開かれている、他にはない音楽にかかわるコンサートが行われるところとか、子どもから高齢者まで音楽を楽しむ場所が多様にある、音楽だけではなく芸術分野一般で何かコラボレーションが豊かに行われている、というのが考えられます。

当然のことながら、中山晋平、高野辰之、久石譲さんというようなシンボリックな先生方もいらっしゃいますが、もう一つ考えたのは、これからの展開として、姉妹都市との本当の音楽的な付き合い方というのをもう一度考えてみる必要があるということです。中野市には音楽関係として仙台市や竹田市などがあって、これを活用していく必要があるんじゃないかと。先般仙台市を表敬訪

問して、仙台市長が再選して良かったんですけども、仙台にはフィルハーモニーがありますので、小編成でもいいから中野市にいつか派遣して欲しいと、フルオーケストラでなくても結構ですから、というような交わりができれば面白いなと思ったりもします。

あとは音楽と街並みのシンクロですね。例えば外から来たお客さんを想定すると、入ってきた方が信州中野の駅でもいいんですけど、中野市に入ったときに、ここは音楽のまちなんだなと思わせるような、言ってみればヨーロッパ旅行でザルツブルクに言った経験のある方はいらっしゃるでしょうか。そこに行くとき音楽のまちなんだなという、まあ我々がそういうイメージを持って入っていくからそういう風に見えるんでしょうけれども、いろんところで音楽が、音が流れている。フィレンツェに行っても中央公園ではギタリストが路上で、例えば中野でいったら陣屋のようなところで観客がいなくてもギターの音が流れているとかですね、そういうような景観があるわけですけども、そういった景観、街並みと音楽がごく自然に存在していると、別に際立った建物がなくても若い人たちが気軽に演奏していると、ないしはお年寄りが気軽に何か音楽をやっているというような世界を想定してみました。

それによって、中野市に行ったら音楽の豊かな世界がそこには広がっているんだなと思っていただけます。ただし、音楽だけではなくて、そこにある自然景観や土人形もそうだし、それらを背景としたものがゆったりと調和している世界を想定してみました。

これらを全部ひっくるめて何だと言ったら、やはり協調・シンクロしているというか連携しているというか連動しているというか、そういった言葉で、私が市政（報告）の中で言っている中野市のイメージが出来るのかなと思います。

話は戻りますが、そういった中でこれからの中野市はプラットフォームが必要だと申しあげましたけれども、長野市の活動をベンチマークしてみようということでちょっと調べてみたんですけども、今、長野市民会館の建て替えの話が進められている中で、「響つないで」というプロジェクトがずっと行われています。長野市民会館が閉館になってから、松代と篠ノ井の市民会館と3つをつないで音楽の流れを絶やさないという形で、連動して市民のいろんな団体の皆さんを活動に登録してもらい、その人たちの活動を側面から支援して、「響つないで」というコンセプトで外に向かって情報発信していく。やり方は簡単なんですけど人前で演奏したいという人を登録してもらい、それを上手にコーデ

ィネートする。このようにテーマで響きをつないで新たな会館ができたときに、音楽の灯が途絶えず、スムーズに会館運営が出来るようにしようという形で動いているものです。

こうした活動ってというのは、ちょっと面白いなあと思うわけです。ある種のプラットフォームを作り、全ての音楽的な活動をやっている人達に登録してもらって、私達が足りないものを支援すると。例えば企業で考えれば広告戦略でもそうですよね。AプロジェクトとBプロジェクトがあって、それぞれが同じ似たようなパンフレットを作るのであれば、一体化して広告宣伝費の節減をしてダブリを減らして情報発信をする、これは当たり前の話なんですけど、そんなような手立てもできるだろうし、情報を集約化して情報発信を支援することによって、より強力な宣伝をできるんじゃないかなと思うわけです。中野市にもそういう音楽に関する機能が欲しいなと思います。

いずれにしても、すでにJ Cの皆さんは都合4回にわたってプロジェクトを動かした、企画して実施した経験があります。この経験は、私にとっても非常にありがたく、貴重なものでぜひ今後ともお力をお借りしたいと思っておりますが、今日は3つのお願いを申し上げたいと思います。

先ほどプラットフォームと申し上げましたが、私が今政策的にやりたいのは、中野市の若者会議をやりたい。これから20年先を考えて、20年後の人口推計では中野市は3万5千人になりますが、その中で中野市の人口を減らさないようにするためにはどうしたらいいか、ということで私たちに住みやすい地域、仲間が集ってくるような世界をどうやって作るか、ということ若人たちに集まってもらって考えてほしい。この取り組みは全国でも始めたところが2・3ありまして鳥取市とか、率先的にやっているところもあるんですが、これはある意味、私のような人生の第4コーナーを回ったような人間がいつまでも将来の中野市って言ったら、自分の老後しか考えないから、逆に言うとこれからの養護施設はどうあるべきかとかですね、考えちゃう。そういうことよりも皆さんが60歳位の時にどういったまちを、より魅力のあるまちができるかということを考えてほしい。中野市は、こんなことを言っただけでも変かもしれませんが、私のような年かさの上の人に遠慮して、発言する機会がないのではないかと、思うわけです。家内にもいろいろと聞いていますが、なかなか若い人たちは発言しないと言っていました。市役所の中でも言えない環境があるそうです。(笑) そうではない。元気なまちには若い人がつくるものです。

別のわくわく市民懇談会の会場でも申し上げましたが、男尊女卑の地域には人はやってきません。旅館でその主人が女将を叱りつけたり、鼻であしらうような宿にはお客は寄らなくなります。特に女性はそういう雰囲気ですぐ察知するらしいですね。男女共同参画は積極的に取り組まなければならない。そうしなければ観光も育ちませんし、観光客も来ないと、あるコーディネーターにはっきり言われました。そんなこともあるので若者会議には男性だけではなく女性にも入ってもらいたい。第一に、若者会議には、是非JCの皆さんに参加してもらいたい。

次に、来年バラサミットの開催を予定しているわけですが、JCの皆さんにバラサミットを中心になってもらえないかと、今日はお願いに参りました。岩見沢市のバラサミットを中心となっているのは地元のJCと高校生の皆さんでした。これがとても素晴らしかった。最初はどうか、と思ったのですが、だんだん盛り上がってきて最後にバラサミット当日までの準備の様子をたった5分の映画でしたが、その映画を通じて、岩見沢市がどれだけ市民参加を得てバラサミットを開催したのかがわかってとても感激しました。できるなら中野のJCの皆さんにバラサミットの運営の中心として受けて立っていただきたいとお願いに来ました。岩見沢市のバラサミットでは、地元の高校生とのコラボレーションに加えて、ウェルカムコンサートや百餅若衆による餅つき披露があり、とても斬新でしたし、参加された方はきっと考えを持って帰ったと思います。私には一つ発想がありまして、岩見沢のサミットでは首長は地元の紹介や宣伝を滔々と話して、わけのわからないうちに会議が終わってしまう、これはやめようよ！と。これだったら映像で紹介すればいい。パネルで紹介すればいい。視覚的に訴えるようなサミットにしていきたい。来年のサミットではパネルディスカッションです。バラにまつわる方々を呼んで。例えば「音と花のまちづくり」「音楽と・・・」のようなテーマで私たちも学べるような場を提供していきたいと思っています。こういったアイデアを私一人ではなく、是非皆さんと一緒にやってみたいと思っています。これもお約束できるかどうかわかりませんがJCで作成されたバラカルタも活用したいと思っています。ITを絡めて、老若男女絡めて参加型のものにしていきたいと思っています。

話がだんだん脱線してきてしまいましたが、やりたいことは、音楽について申しますと、「つながる、連携」という観点でバラサミットの件になりますが、バラまつりの期間中にいろんなコンサートや音楽イベントをちりばめていき



い。いろいろなものをその期間にやることによって一大祭典として実施していきたい。バラ祭りの期間中にバラに関するあらゆる企画をちりばめることでバラ月間のような形で盛り上げることも可能です。考えてみたら、中野市の祭りは1日、2日で終わってしまうものが多い。バラまつりに関してだけはある一定の期間をとっていることが非常に重要と思っています。その間で集中的に企画していきたいというのが私のやりたいことです。

3つめは、実は一番難しいことですが、1つ目と2つ目はある意味で短期的なプロジェクトですが、長期的観点に立って、観光に関してJCの皆さんと真剣に考える場を持ちたい。まず、私の中で北陸新幹線の開通への思いが強くあって、私は北陸新幹線開通は中野市にとってプラスであると言ってきましたが、それは私たちが行動すれば、という前提があつての話でして、新幹線の駅ができるとその周辺にはそれなりの重力、吸引力が発生します。いわゆるストロー効果というものです。例えば佐久平駅ができましたが、駅ができたことによって、小諸の人口が減って、佐久の人口が増えています。駅ができると人流が発生し、渦のように人が集まるので魅力を感じます。新幹線の駅は空港だと、私は日頃から言っています。空港の周りにはどこの地域も「市街地」というのはなくて、あるのはターミナルとしての機能です。そこから旅が始まる、40分圏内の地域に魅力があればそこに人が流れる。放射状に旅が始まる、ハブですね。ということからすると、中野市でも観光開発をすれば人が来ると。何もしなければ他に人が行くのは明らかで、東京方面で話を聞くと、「中野のみならず、北陸まで新幹線が行くと長野は沈んじゃうね。」とほとんどの人がそう言います。長野市でインターネット調査したと報道がありましたが、たしか46%が長野で降りますと回答があつたそうですが、これはニュースとしてはあまりデータの意味がないです。魅力があるなら7割の人が長野に寄らないと。これは真剣に取り組まなければなりません。長野ですらそうなのだから、ましてや駅のない周辺都市は相当力を入れられないといけない。

この間、「信州中野」というネームバリューについて考えました。中野市と聞いて中山晋平、高野辰之の・・・とわかる人は稀で、ほとんどいないのではないかと、また、地域を混同している人も多いです。先日の川上村で開催された川サミットで行き会った登山家の方もさくらんぼ狩りをした場所を山ノ内町と混同されており、さくらんぼがあるのは知っているけれども、地域の名前と一致しない、このへんの対策をもっと打っていかないと、信越9市町村広域観光連携

のなかで中野市が一矢を報いるのはなかなか難しいかな、と思います。私たちは外に対する情報発信を真剣になって考えなければならない。今ある資産を見直して、積極的に宣伝もしたいなと思っている次第です。市域でいろんな活動をされている方の情報をとにかくほしいというのが私の思いです。今、市役所の中でもどうやって情報を集約したらよいか考えているところです。情報を集めることの目的は、とにかく連携協働し、外へ太い情報の発信をすることです。中野の存在価値を外に知らしめること、その活動が大事です。

最後に、皆さんと会議、セッションを継続的に行っていきたい。今そこにある課題として新幹線への対応を誤らないようにしたい。若者会議、戦略会議をどんどん開催して期限を決めて取り組んで参りたい。ちょうど今、来年度以降の実施計画をつくりますが、私の考えを入れていく予定です。あと、皆さんの中で、写真とか映像の得意な人がいたら教えてください。今やりたいのが飯山駅ホーム内に大画面で信州中野の景色を流して宣伝したい。ホームで待つ人に次は中野に来ようと思ってもらえると思います。あと、もう一つ、つくりたいのは、ゲストハウスです。インバウンドで外人さんがやってきたときに気楽にナップサック一つで一泊2,500円から3,000円くらいで10日間泊まっても3万円程度のリーズナブルな滞在を目的としたツーリズム向け施設です。そうするとそこを起点に周遊してもらって、皆さんともコラボレーションできるようにして、高校生にもボランティアで参加してもらい、生きた語学研修交流をしてもらう。今、中野市には在住外国人の方が680人いらっしゃいます。そういった方の協力も得ていきたい。そういうものを街中に持ってきたいと思っています。こういった政策も皆さんのご意見をお聞きしながらより現実性のある、より着実なものにしていきたいと考えていますので、今後とも私の市政運営にご協力・ご支援いただけると誠にありがたいということでお願い申し上げまして、本日お集まりの皆さまの弥栄をお祈り申し上げまして、本日の講演を終わります。(拍手)

(質疑応答)

Q1 外に発信するには、中野というのは市長のお考えの中では何が一番、核となるとお考えですか？

A1 今、考えている一番のカテゴリーキラーはきのこです。ざっと見渡してお客さんがきたときに、やっぱり「食」を求める。それをうまく作りあげたい。観光客が陣屋に来て何かないかな、とっていて。カテゴリーキラーはきのこの機能性の「菌食と健康」ということで考えていて、これは9市町村の中でも中野の独占になるので一つ持っていけるかな、と。よくフェイスブックでも書いていますが、健康をお持ち帰りください、と。お土産は何ですかと聞かれたら、一か月間中野で暮らしてもらおうと健康になりますよ。とかね。そこにはスポーツとか音楽とか、ゲストハウスが欲しい。一つだけやるのではなく、総合的に盛り上げていかないとうまくいかないかな、と思います。

Q2 音楽は交流のツールとなりうるとおっしゃったが、音楽が持つ力についてどう考えますか？

A2 バッハの口短調なんか歌うには、私のような素人が練習して作りあげるのに2年かかります。歌った後の皆で一緒につくりあげた共感の喜びがある。音楽を聞いて涙することもある。「ふるさと」のように歌自体が共感する力をすごく持っている。一つの言葉、メロディーでつながっている。「春の小川」を通じて中野市（豊田地域）は東京都渋谷区につながっています。

Q3 県外から人を招いたときに、何を見ていくかという、最終的にはそこに住む人を見ていかれると思いますが、中野市民に対する戦略、人をどうやって変えていくかという市長の戦略をお聞きしたい。

A3 戦略的には市民全員が平均的に変わっていく、これは無理なので、私は思いの強い人たちが集まって、核となっただき、徐々に広げていきたい。どうしても保守的な方は、始めはついてこれないかもしれません。私の思いや、こういうふうに変えたい、という強い願いのある人に集まってもらって、そちらを支援していきたい。上杉鷹山の米沢藩の改革と同じで、変えようと思ったら、最初は藩内の人に理解してもらえなかったが、火鉢を探してみたらまだ燃える火種があるではないか、という例えのように藩政改革をやったという話もあります。改革という言葉はふさわしくないかもしれないが、変化にきちっと対応していく、もっと活力があるはずなのに、どうしてなんだろうと思える人、

情熱のある人たちが集まって初めてできるものだと思っています。そういう人たちが1人でも2人でもいれば私はそういった方とまずコラボレーション、協働していきたいと考えています。

19:55 終了

